

術中迅速細胞診への導入を目的とした UltrafastPapanicolaou 染色の検討

◎介川 雅之¹⁾、成清 羊佳¹⁾、古屋 佑真¹⁾、大石 彰太¹⁾、小林 隆樹¹⁾、国仲 伸男¹⁾
国立研究開発法人 国立がん研究センター東病院¹⁾

【はじめに】術中迅速細胞診は、癌細胞の有無を短時間で判断することで、その後の術式や治療決定に関わる重要な検査である。当院では、検体提出から 30 分以内に診断報告を行っているが、追加で特殊染色等を行うと 30 分を超過する可能性もありうる。そこで、通常迅速診断用の Papanicolaou(以下、Pap)染色よりも短時間で染色可能な UltrafastPapanicolaou(UFP 染色)標本が有用かを検討したので報告する。

【材料・方法】対象：体腔液(胸水・腹水)25 症例。体腔液を遠心(3000rpm・2分)後、引きガラス法にて塗抹標本を 2 枚作製した。血液が多い場合は、1 回目の遠心後にサイトライト液(ホロジック)を入れ、再度遠心した。1 枚は、日常迅速診断で使用している Pap 染色で、もう 1 枚は UFP 染色を行った。両染色の染色試薬は武藤化学株式会社の試薬を用いた。Pap 染色はギルのヘマトキシリン 1 分、OG-6 1 分、EA-50 1 分 30 秒で所要時間は約 10 分、UFP 染色は、藤化学株式会社の推奨プロトコールを用い、ヘマトキシリン Q 10 秒、OG-6Q 5 秒、EA-50Q 30 秒で、所要時間は約

2 分である。

【結果】UFP 染色では、赤血球が OG-6 にやや濃く染まる傾向にあった。UFP 染色は、Pap 染色と類似した染色性を呈し、正常細胞と異型細胞や腫瘍細胞との鑑別は可能であった。中皮細胞の微絨毛も良好に染色され観察することができた。腺癌の厚みのある細胞集塊では、ライトグリーンの色が入りが悪く、個々の細胞の観察がやや困難であった。しかし、今回検討した 25 症例では、UFP 染色および Pap 染色での診断が一致した。

【まとめ】UFP 染色が術中迅速細胞診検査に導入の可能性が示唆される結果が得られた。術中迅速細胞診検体は、洗浄液で提出されることが多いことから溶血する機会は少ないと考えられるが、UFP 染色を導入する際には標本作製の過程での溶血操作の有無の判断が適切な診断に繋がると考える。

絡先：04-7133-1111